

# 猿

—  
写  
生  
帖  
よ  
り  
—

正午のサイレンが鳴ってしばらく経った。本堂の方もひっそりして、参詣の人の影もなくなつたようであつた。辺りには昼飯を食つた後の暖あつたまつて伸びたような気分がみなぎつていた。本堂の前にある大香炉から昇る煙は、冬の落着いた陽ざしの中に音もなく筋をひいて宙にただよい昇つて消えて行つた。風もなく暖かい静かな陽気である。

猿は日向ぼっこをしていた。一本の細い丸太の上に陽を左から浴びるような向きで腰を掛けて膝を抱えて、その上に頭を横にもたせて眼をつむつていた。考え草臥れたデイオゲネスがそのまま眠り込んでいるような恰好だつた。

毛並みの灰色はもう艶があせて、よごれた白髪のような感じを与えた。ところどころ肩や肘の先など、すっかり毛が落ちて、青黒い皮膚が露わに出ていた。膝の上の顔は半分隠れて鼻から右半面が見えた。額にも、つむつている眼尻にも頬にも深い皺があつた。その皺だらけの顔は見様によつては変に分別臭く、こましゃくれているようにも見えた。またこの哀れに静かな姿は、猿がもう相当な年齢であることを語つていた。

猿のすぐ後方には、入口のある四角の箱があつた。箱と言つても、よく見れば屋根のようなものもついていた。猿の寝小屋であつた。猿がはいれば一杯になつてしまふような小さなものだつた。傍には道路工事によく使う二寸四方位の四角い石や、コンクリートのついた煉瓦などが一杯あつて、後方の大きな石の塀の下まで傾斜を作つて盛り上げてあつた。その塀はこの寺全体を囲っている長い頑丈な高い石塀だつた。これが西南から北東の方に続いていて、その一部が猿の日向ぼつこの後側に來て寒い風を防いでくれる防壁になつていた。猿のいるところを中心にして塀の前に半径九尺ぐらいの半円を描くと、丁度そこが猿の囲いの柵が立っているところだつた。猿の首に繋がつている鎖を見るとおおよそ五尺

程だろう。それなのにこの柵の円の半径が九尺程もあるのは、これは多分その鎖が一杯張られたのと、柵から乗り出した人間の手の長さを加えて設計したのだろう。そういう考慮は人間どもの出来心の残忍な行為を防ぐのが目的であるように思われた。

柵は三尺ばかりの杭の上に厚みのある板を横にわたして出来ていた。柵の半円は右手の石の堆積の向うの石塀からはじまって、猿の前に弧を描き、左手は鶏小屋に終わっていた。猿の左側に四尺ばかりして塀に直角に出て柵の半円を中断している鶏小屋の板囲いがあつた。石塀から柵までの長さで三尺程の幅の細長い囲いだつた。四方を板にして天井の半分が金網になっていた。中は穴蔵のように暗かつた。奥の方に鳥屋が一段高くあり、とまり木が一本、地面にはどす黒い水のはいつている桶が一つあるきりだつた。地面は鶏の足がもぐってしまう程ぬかつていた。鶏は五羽いた。一羽のコーチンと四羽の真つ黒なチャボがいた。不思議なことにみんな立派な鶏冠をつけた雄ばかりだつた。彼等は雄同士で土牢へ投げ込まれた政治犯人のように、つえばむものもなく薄暗い中に黙りこくっていた。コーチンだけは地面にいたが、チャボ達はとまり木や鳥屋に上っていて、目をつむつたままカサともしなかつた。勿論満ち足りて眠っているのは正反対のものだつた。たまに一羽が目をさまして眠っている隣の相棒の首を見たりする。羽毛が抜けて赤肌になつた首筋にまだ一本残っているのを見付ける。目を覚ました鶏はそれを大地に生えた青草のように思つて、その最後の一本をついばむ。つつかれた方は一寸身じろぎをするだけでまだ眠っている。食べてしまった方は、味わいと言うものと凡そ遠ざかつた感覚が喉にしたのか、ややしばらく索莫とした顔付をしているが、それもやがてまた眠る以外に手がないうことを悟る。そんな具合でこの薄暗い鶏小屋は五羽の鶏がいるのかいないのか判らないようにひつ

そりしていた。

この哀れな生き物どもがいる柵の前の三、四間あいだを置いた正面には、本堂の高い縁が聳えていた。高い縁の銅の擬宝珠のついた欄干の上にまた聳えるように寄進の炭俵や薪束が高々と積んであった。その上に更に高く見上げるように本堂の大きな柱や扉が聳えて、その上には時代のついた柱の飾りや椽たるきの揃った檐裏のきうらが頭の上へ覆い被さるよう見ええた。本堂の正面には大きな鰐口わにくちや銅の吊灯籠が下がって、正面の階段に沿って本堂の屋根が張り出ていた。本堂の前からは石畳の道があった。途中に大香炉や手洗いがあって、山門に抜けていた。山門の外はこちらから見えるところには、髯むじやの勿体ないように逞しい体格をした乞食が何時ものように坐っていた。

山門の右側から絵馬堂が廊下のように細長く続いて、コの字形に曲って、ずっとこちらに伸びていた。こちらのどん詰まりは囲炉裏を切った狭い座敷で、堂守の住居になっていた。そこは屋根が一階高く重なって、屋根裏部屋のような二階があるらしく、屋根の下に障子をはめた寺院風の窓が一つ開いていた。この座敷の壁の裏から一間ばかり距へだたって猿の柵があるのであった。

この屋根裏の屋根は猿から言うところと生憎なものだった。丁度柵から西南に当たっていたので、ともすれば陰を伸ばして、猿の日向ぼつこの邪魔をするのだった。こいつは夏になれば反対に意地悪く、陰を引っ込めてしまうに違いなかった。だから猿がこうしているのは今の間にも思っているのかも知れなかった。

突然、本堂の檐から絵馬堂の屋根裏に通じている細い縄が、吃驚して飛び上がるように跳ね返ってガチャガチャと鳴った。しばらくすると屋根裏でぎいぎいと梯子段がきしって、

やがて窓からにぶいたるみ切った太鼓の音が泳ぎ出た。毛布を叩く音に似ていた。

猿は眼を開けて薄茶色の瞳をのぞかせたが、顔を上げて見回すのもなく、もとの姿勢のまま、また眼をつむった。

太鼓が睡気から醒めないような響を二たかえりばかりさせて終わると辺りは再び静かになった。ずっと向うの鐘楼の向う側の見えないところから鳩の群が舞い上がった。晴れた蒼い空に舞い上がり、一回りして下りて来た。ここからは羽音一つ聞えなかった。辺りの空気の睡さと猿の瞑想を破るものは一つもなかった。

しばらくすると一つの陰がゆっくりと地上を這って近付いて来た。陰はアレキサンドル大王の陰のように陽向ひなたぼつこの邪魔をするほど猿の近くまでは寄らなかつたが、猿はその足音でビクとして眼を開けた。余り愉快そうでもなく眼だけを前に向けた。次いでやや意識を取り戻したように顔を上げて、よって来た人間の顔を見上げた。そしてすぐ習慣的にその人間の二、三尺前の地面に視線を移した。実行力に富む人間にして、もし慈悲の心をもつてこの猿に近付いたならば、柵に寄って立つや否や物を投げてよこすのが当り前だ。猿の習慣的な視線はそれを半分予期していたのであった。

地上には何もなかった。そしてまた落ちてよこしそうな気配もなかった。柵に寄りかかったのは一人の労働者だった。シャツの上にじかに茶色のさめた背広を着て、下は半ズボンに足の指が足袋のように分かれた靴下をはいて草履をはいていた。日焼けした平たい顔に鳥打帽が浅くのついていた。彼は人の好きそうな微笑を浮かべて猿に手を出した。

「ツツツ……」

と彼が舌を鳴らして差し出した手を動かすと、猿は誘われて元気よく立上った。猿は彼の

顔と手と地面とに交互に眼を走らせながら前へ出た。猿は手を前に重ねて後脚で立った。その姿は神妙らしく小腰をかがめた人間のように見えた。労働者の手に何もないのを見て猿は彼の顔を覗き込んだ。

「ゲウ、ゲウ……ゲウ……」

猿は蛙のように喉を膨らませて、あの野性的な叫び声とは似もつかない奇妙な声を出した。その可笑しい恰好も奇妙な声も、飢えと共に教えられた芸であった。そしてこの芸が催促する何かは不思議に人間の胸によく通じた。

労働者は歯を出し、顔中を皴だらけにして喉の奥で笑った。そして彼は反射的に手を引っ込めて両手で服のポケットをまさぐった。何もないらしく掴み出したのはバツトの空き殻だけだった。彼はそれをしまいかけたが、不図また取り出して空き殻の中を無意識に指で探った。猿はその箱を見ると何か貰えるという期待に落着けなくなって、労働者の顔とその手元とを忙しく見比べながら、キョロキョロした。

「ゲウ……ゲウ……」

彼はバツトの空き殻の抽斗ひきだしになっっている白い紙を一寸ぐらいに丸く切って、猿の傍に投げてやった。猿は横っ飛びに跳ねて素早くそれを掴んだ。掴んだと思うと放り出していた。……こんなものが食べられますかってんだ。違いますよ、旦那……労働者は面白そうに笑った。猿は再び彼の前に立った。二、三度喉を動かしたが、声は出さなかった。労働者はただ笑っているばかりだった。何も貰えないことが猿にも判って来た。

猿は諦めて後方にある丸太のところまで戻って腰を下ろした。労働者は尚も面白そうに喉で笑っていた。猿はその方をチラと見てすぐ眼をそらした。左手で鼻のわきをこすった。

キヨロキヨロした眼にも明らかに不満の色があった。……からかっちゃ不可せんよ。ひとの飢<sup>ひも</sup>じさなどをからかっちゃ不可せんよ。旦那……労働者はバットの殻をクシャクシャにして傍に捨てた。そして猿の方を見い見い笑いながら柵を離れた。

猿は飢じさが俄かに目覚めて来たのかその辺を物色し始めた。鎖を張って出来るだけ遠くに出ながら、右手の四角い石の堆積の向う側の方へ地面を漁<sup>あさ</sup>って行った。何度も漁り尽くして何もないような地面にも、時には思い掛けないように黄色い菓子の小さい碎片などが見付かった。猿は念を入れてその砂を払い、美味しそうに嚙んだ。

向うの石畳の上で鳩が舞い上がった。その中をぶらぶら歩いて行く労働者の後姿が見えた。

一羽の鳩が近くの本堂の檐<sup>ひさし</sup>から羽音をキュッキュツと言わせて下りて来た。上嘴<sup>じょうし</sup>の両側に眼鏡のように丸い二つの珠をつけた、体の肥った背の黒い鳩だった。鳩は猿の柵の前の黒い土の上を、首を動かしながら桃色をした脚でよちよちと歩いた。その辺りを物色しながらだんだん猿の居ない右側の方の柵に近付いて行った。そのうちに鳩は柵の中に何か見付けたとみえて、柵をくぐってよちよちはいつて来た。猿は急に頭をもたげて振り返った。猿は鳩のねらっている物があることを知ると矢庭<sup>やにわ</sup>に立上り、細かい尖った歯をむき出し赤い口を開けて、

「カーッ！」

と言って威嚇した。人間の片手で楽に掴みつぶしてしまえそうな小さな顔が恐ろしく瘳猛に見えた。鳩は驚いてその場から宙に舞い上がった。

猿は鳩が高く舞い上がるのを見澄まして、右側の方へ跳んで来た。鳩のねらったものは判っていた。猿はそのまま手を伸ばそうとしたが後ろの鎖を一杯に張っても目的物は遙かに遠いところにあった。首輪を肩にめり込ませる程力を入れて引張って手を伸ばしても、一尺は充分に離れていて、詮せんないことだった。猿は思い返して手を伸ばすのを止めて、体を横にして左脚を伸ばした。いい智慧だった。一度は見当を外したが、いったん体を起してよく見据えておいて後に、再び横になって試みた時はうまく目的物を掴んだ。一寸平方ぐらいの平たいもので泥にまみれて真っ黒になっていた。煎餅の一片なのか蜜柑の皮なのか見ただけでは判断がつかなかった。猿はこれを持って小屋の前に戻った。そこに坐って両手でこの獲物の泥をしきりにこすった。手がよごれてしまふと獲物を足に掴ませておいて、両手をしきりにこすって汚れを落とした。そしてまた獲物をこすった。泥はどんなにしみ込んでいるか判らなかった。くり返しくり返しこすったが、獲物は依然として真っ黒なままだった。猿は時々じれたように嗅いで見たが、決して口に入れようとはしなかった。しばらくそうしていたが結局駄目だと判ると、猿は思い切って傍へ放り出した。猿は土をとるために手と足をこすり合わせた。猿は左右の肘をかわるがわる搔いて、小さく欠伸をした。

猿は足元を見つめた。足元の石ころの間には武蔵野の何処でも見付かるような黒い蟻が走っていた。猿は今度は蟻を眼で追い出した。目玉と一緒に小さい頭がせわしなく動いた。ねらっておいて突然電光のように左手が伸びて蟻をつまみ上げた。口に入れると喉が大袈裟に動いた。こんなのが腹の足しになるわけではないだろう。しかし報酬は少ないが狩猟の面白さがあつた。さっきの腹癒はらいせもあつた。キョロキョロと石の間を探し始めた。蟻共



は身の危険を感じて敏捷に石の間を縫って隠れた。猿は隠れたあたりの石を見当付けて、ソツと手を突いてそちらに体を乗り出した。確かにそれと判ると恐ろしく真剣な表情になった。子供の鄙ひなびた遊びに地面に小石を数個並べて、その一つの石の下に藁切れのようなものを隠して、それを相手に当てさせるのがある。猿はその「ごみ隠し」の石を起す子供のように見当をつけた石に慎重に手を下ろした。そしてソツと起こした。アツと言う速さで片方の手が走って獲物をつまみ口に入れた。呑み込んだあとで嬰兒のように小さい咳をカッ、コツと二つばかりした。

「やあ、居やあがる居やあがる」

「まだ生きてやあがるんだなあ、こいつ」

柵の傍に背の高いのと小さいのと二人の中学生が立っていた。年は一人とも十五、六で、同じような制服の肩から鞆をかけていた。猿は顔を向けて彼等を見た。しかし猿の眼にも判った。この中学生達が物をくれようとは思われなかった。猿は蟻を追いかけるのを止めた。二人がジロジロ見ているので気が落着かなくなってきた。中学生達に背を向けたまま中途半端な姿勢で、時々頭を動かして、肩越しにチラと二人を見たりした。

「コラ、こつちを向かねえか。猿公。えて公。キャン吉。エ、コラ」

「向かなきゃ向くようにしてやろうか」

大きい方が左手で鞆を押えながら足もとの小石を拾った。猿の背をねらって投げた。石は遙かにそれで石の堆積に衝突して、ジッ！とはね返った。猿は跳び上がって向き直った。

猿は立上った。腰を低くして二人の挙動を窺うかがいながら警戒した。その間に小さい方が石を拾って構えていた。大きい方も拾って、二人殆ど同時に投げた。猿は身を固くした。二

つとも当らなかつた。

「当たらねえな」

と大きいのが呟いてまた石を拾った。猿は蜘蛛のように体を低くして逃げ出した。逃げ出したところで別に隠れる場所はなかつた。小屋の中は口が大きく狭くて反って危険だった。猿は小屋の前で腰を浮かせて立ちながら、ふるえる左手で鎖を握っていた。二つの方向から石が代わるがわる投げられた。中には肱や肩に当たるのもあつた。猿はその度に思わず歯をむいた。勿論猿にも石を拾って投げ返すことは出来た。しかし応戦したところで何になろう。多勢に無勢だし猿に比べては中学生達の大きさは巨人に近かつた。地勢も悪いし条件も悪かつた。石が当つた時の鋭い痛みには勃然<sup>ぼつぜん</sup>として思わず歯をむいては見るもの、それだからと言ってどうしようもなかつた。

大きい中学生は今度は思い切つて大きい石を拾い上げた。鶏卵ぐらいの石だった。彼は残忍に口をゆがめて、掛声と共にそれを猿目がけて投げつけた。猿は頭を低くして右手で頭をかばつた。運悪くその空いた脇腹に大きな石がひどい勢いで当たつた。デエツ！という音がした。猿は引っくり返りそうになつた。飛び上がつて歯をむいた。今度ばかりは歯をむいたばかりでは気持ちがおさまらなかつた。猿は小屋の上に駆け上がり赤い口を開けて、

「カーッ！」

と言いなながら小屋の屋根の縁に手をかけて小屋諸共ガタンガタンと躍り上がった。猿としては精一杯の示威<sup>じい</sup>であつた。精一杯の憤激<sup>ふんげき</sup>だつた。

「アハハ、怒りやがつた、怒りやがつた、どうだい見る、あの顔付」

大きな中学生は今までの興奮に蒼ざめていた顔をゆるめて笑った。猿の激昂はすぐおさまった。怒ったところで何になるう。猿は暗い顔付をして小屋の上に坐った。なるべく視線を中学生達からそらすようにして、手で足の裏を払っていた。小さい方の中学生はもつと怒らせて見たいらしかった。柵にのしかかって猿に向って、

「フーッ」

と言って尚もからかった。猿は脇腹をいじりながらソツポを向いていた。

「フーッ、プッ」

「おい、危ねえぞ。油断してるとやられるからな。パッとやって来るんだ」

大きい方が注意した。猿は知らん顔をして茶色の眼を山門の方に向けていた。小さい中学生は焦れて来た。彼はもたれていた柵を握って激しく揺すりながら、

「バブルルッ！」

と嚇おどかした。猿は一寸振り返っただけで身動きもしなかった。驚いたのは鶏だった。柵続きの隣の鶏小屋がガタガタ揺れたので、ケケケーッといって跳び上がった。

「おい、鶏かあ、これあ」

小さい方は鶏小屋の傍へよつてのぞき込んだ。

「おい静いちゃん、この鶏、栄養不良じゃあないか」

大きい方もよつて来た。

「何も食うものありやあしないじゃあないか」

「ハハ泥んこになってやあがらあ」

チャボのうち一羽は上の鳥屋に、二羽はどす黒く濁った水の桶の縁にとまっていた。あと

の一羽は揺すられたので揺り落されたらしく地面にいた。コーチンは泥の地面を相変らず気色悪げにバチャリバチャリと歩いていった。そのうちにコーチンがコツコツと行って地面に落されたチャボのそばへよって来た。チャボの背中へバタバタと躍り上がった。チャボはケーツと叫んで背中中のコーチンを邪険に揺り落した。

「ハッ、ハッ、こいつお門違いしてやあがる」

大きい方の中学生はコーチンのいる方の羽目板を靴で蹴った。

猿は自分の方が忘れられて漸くホツとしたようだった。猿は鎖のつないである杭の頂上に足をかけて石堀の土台石の上上がった。そこから石堀の中途に寺の紋が浮彫にしてあるのに手をかけて、これを足場にして、苦もなく堀の上によじ上った。上は石がやや拡がって一尺ばかりの幅があった。堀は高かったが杭の頂上からの鎖の余裕で、猿は堀の上を四尺ばかり自由に往復することが出来た。そこを二、三度往復するかしないうちにまた中学生達に見付けられた。

「やあ、あんなどころへ登りやがった」

二人は口を揃えて、

「いばってやあがるな、コン畜生！」

と言うと一斉にまた石を探した。猿はこの勢いに驚いて腰を下ろした。一体どうしてこのように彼らの怒りを買うのだろうか。猿はただ呆然と二人を見下ろしているばかりだった。再び石が飛び始めた。堀の高いところだと、石は一層当らなかつた。石は猿の頭上遙かに高く越えたり、石堀にはね返ったりした。大いに腹を立てた大きい方の中学生は手袋を除いて、傍の杉の根元の乾いた土を手一杯すくって来てパツと投げた。バラ弾丸戦術だった。

これにはもう猿も逃げられなかった。蹠しゃがんですくんでいたが、一撃で肘から顔へかけて無惨に土を浴びた。猿は両手を泣くような格好に持って行って次の襲撃を防ぎながら、狼狽あわして眼をこすった。小さい方の中学生もすくって投げた。それは塀から猿の足のあたりに飛び散った。次の一弾は猿の腹や足や手一面に当たった。土や砂は猿の毛を吹き弾はじくように分けて肌に食い込んだ。猿はよけて手をついた。塀の向う側へ転がり落ちない用心もしなければならなかった。続いて次の土が飛んで来た。体についた土を払うどころではなかった。立直る隙もなく次々と飛んで来た。塀の下の二人は尻の鞆を踊らせて土をすくって戻っては投げた。杉の根元には相当な穴があいた。二人は手を真っ黒にし、息を弾ませながら、尚も止めようとはしなかった。塀の上の猿は全身土まみれになった。あとからあとからと絶え間なく叩きつけるように飛んで来る土くれを殆ど防ぐことが出来なかった。土の弾丸の中にすくんでいるきりだった。僅かに手と肱で頭をかばいながら、体のどこかに土が当たるとただよろけて、体を震わすばかりだった。

板と壁で隔たった堂守の部屋では囲炉裏の鉄瓶が長閑に歌を歌っていた。

「そこだよ。ああ。お前さんよく気がついた」

「妾わたしだってそのくらいは考えるよ」

「いやそれだけ考えりゃあえらいよ」

「えらいかねえ」

「えらいとも」

「そりや妾だつて一生懸命だよ。……毎日一生懸命やるんだが、何故かねえ。どうしてみんなあなのかねえ」

「もう一ふんばりだ。ねえ？もう一ふんばり、そこまで行ったんだから、もう一足前へ進めるんだね」

「アア」

「そう悟ったばかりじゃあ駄目だ。悟ったら実行しなけりや不可いない。ねえ？」

「悪いとわかった自分の心を清めるんだ。それだつてただぼんやりしていたんじやあ出来ない。出来ないね。汚いものを出してみんな出して、捨ててしまあなけりやあ駄目だ」

「何処へ捨てるんだね」

「何処へつて、心の外サ。エ？心の外さ」

「ア、外へねえ」

「判り易く言うと、例えばさ。ねえ？例えばここに、井戸換えをする」

「ア、井戸換えをねえ」

「そうだ。井戸換えをするにやあ井戸水をどんどん汲んで捨てなけりやあならないじゃないか。その水を惜しがつて何処へ捨てようなどと迷つたりしちやあ、井戸換えは出来あしない。ねえ？」

「ア、」

「くんではすて、くんではすて、さ。悪い水を捨ててしまつてはじめて清い美しい水が出て来る。この気持ちだ。この気持ちで日々のわたし共の心をなおして行かなけりやあなら

ない。腐っちゃあ不可ない。腐らかしちやあ不可ないね」

「アア。心は腐るんだなあ」

「そうさ。腐らないようにするには魚を塩漬けにする。ねえ？塩を入れる。世の中の塩は何だって言うとお上人様のお教えだ。お上人様はどんな処へ行ってもどんな事を言われても、今にも首を切られるっていう事になっても、なんにも仰有おっしゃらなかつた。この氣持ちさ」

「あの、そら、お上人様がね。首を切られるってね。空からピカピカッてね。刀が三本に折れたってね。ありやあ何処だっけねえ」

「龍ノ口さ。鎌倉の龍ノ口だ。お前さんもこの間行つたじゃあないか」

「ああ、あそこかね。近いとこだねえ」

「わたし達の苦労なんでもものは、お上人様の御苦労に比べたら、ほんのこれっぽちもないさ。お上人様は大した苦労をなすつた。しかも御自分じゃあ一言もこぼした事はない。何処へ行っても、どんな人間に逢つても御意見を一心になつて説いてお回りになつた。ねえ。中にやあわからない人間もいる。わからない相手に逢うと、お上人様はわかるように話せなかつた自分が不徳だつた、とねえ。すまないと仰有る」

「フトクつて言うのは何だね。こんなことオ訊いちゃ悪いかねえ」

「いやそんな事あないさ。不徳だつて言うなあ何さ。御自分が至らないと仰有つたんだ」

「ア、…」

「とにかく、お上人様くらい、ほんとにあの人くらい他人のためにあんなに尽くして、あんなに悪く言われて難儀した方はない。あんなに悪く言われて、あんなに一生懸命やって、またあんなに喜んだ方はない」

「あんなにねえ……」

「龍ノ口でも、自分は子と生まれて不孝者。民と生まれて不忠者。だから法のために命をおとすのはせめてもの自分のうれしいことだ。と、あの間にこそ仰有った。実に貴いお気持ちじゃあないか。ねえ？」

「ア、」

「お上人様が静かに坐っておいでになる。後へ廻った首切りの役人が刀を下そうとする。その刀が三つに折れたって言うが、刀が折れたんじゃあない。刀を持っている人の心が折れたんだ」

「ア、人の心も刀みたいなものかねえ」

「いや、人の心が刀だって言うんじゃあない。こう言う大きな心を持ってらっしゃる方には、到底そんな刀など立たなかつたんだ。……ねえ？……判ったかね」

「ア、よく判ったよ」

もうあの中学生達はいなかった。猿は体についた土を丁寧に払いおとした。すっかり払い落とすと、手をつけて腰を起した。腰をしゃんと起し頭をもたげて、鎖の許す限りの堀の上の一米ばかりをゆっくりと往復した。猿はその堀の高みをゆっくり楽しみむことが出来て、やっと一個の生物としての気位をとり戻したかのように見えた。日々の凌辱<sup>りょうじよく</sup>と虐待を忘れ、猿はこの高みの空気に励まされて、明日を思い未来を思い生まれ変わる先を思っているかのようにであった。この悲しい鎖も今は別に気にならないようだった。むしろこの鎖の許し



ている塀の上の一米が、兎に角一米でもこうしてあることが、未来に於ける無限の希望を保証してくれているかのようであった。

猿は尚も幾度かゆつくりと往復した。そして尻を張り頭を持ち上げたその小さな姿には、次第に昂然としたものが加わって来るようであった。  
(昭和十六年二月十日)

「新風土」小山書店、第三十一号三月号

289 頁    デイオゲネス    …… 古代ギリシヤの哲学者。物欲を否定し、家を捨てて大きな酒樽に住んだことから「樽のディオゲネス」と呼ばれた。

292 頁    アレキサンドル大王の陰    …… アレクサンドロス大王がディオゲネスのもとを訪れ「何か望むことはないか」と尋ねたら、「あなたがそこに立っていると日陰になるからどいて下さい」と答えたという故事。プルタルコス『英雄伝（対比列伝）』

293 頁    バット    …… 煙草の銘柄「ゴールデンバット」。安価で低所得者向け煙草。  
302 頁    龍ノ口    …… 日蓮上人の龍ノ口法難